The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	従属接続詞の意味 : until と while の場合
Author(s)	田岡, 育恵
Citation	Osaka Literary Review. 1992, 31, p. 33-43
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25432
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

従属接続詞の意味
— *until* と *while* の場合 —

田　岡　育　恵

0．田岡（1992）では、辞書で載せられている「譲歩」の *when* という用法について *when* 自体に譲歩の意味を認める必要はないとした。その理由は、この場合の譲歩の読みは主節と *when* 節の内容から出てくるものであり、*although* のように接続詞自体が逆接の意味を担っているのではないからだ。Declerck（1988）は*when* 節の機能は主節の陳述を制限する事情を表すものとし、そこから時間を表す機能も導きだせると述べている。譲歩の読みが出る場合も *when* 節の働きは Declerck（1988）が示しているような主節の陳述を制限する事情を示すものであり、各々の文脈から譲歩の読みが強く出ていると考えられよう。では、このように抽象的な核になる意味を一つ定めて、そこから色々な意味が場合に応じて出てくるのだということは、*when* 以外の複数の意味が辞書に記載されている従属接続詞にも当てはまるだろうか。複数の意味を持つとされる従属接続詞はいくつかあるが、ここでは任意に *until* と *while* を取り上げて考えてみたい。

1．*Until*

Heinämäki（1978）は特殊な *until* 節として次のような例を挙げ、これらは前提ではなく主節で示された行為の結果を表していると言う。

(1)　John sang until he lost his voice.

(2)　Sam waxed the floor until it was shining.

(3)　Bill kept kicking the door until it opened.

Quirk et al. (1985) でも *until* 節は時間、目的、結果を表現し得るとし、(4)の例で主節の主語と *until* 節の主語が *Larry* と *he* のように同一指示であれば時間、結果、目的が全て結びついているが、*you* のように同一指示でなければ時と結果の意味しか伝えないと述べている。

(4) Larry polished the table until {he/you} could see his face in it.

ここで疑問が出てくる。先ず、Heinämäki の記述についてであるが、主節の行為の結果を示すという記述は、(1)については、声が出なくなることを目的に歌うのではないから歌いすぎた結果、声が出なくなったということで頷ける。しかし、(2)については、床が光るということは行為の目的とも考えられるだろう。(3)についても、戸を開けようとして蹴っているというように行為の目的と取ることが出来る。つまり、(2)と(3)については行為の目的と結果で曖昧になっている。

次に、Quirk et al. (1985) の記述には次のように反例と思われるものがある。

(5) Catherine's heart started to pound until it began to burst out of her chest. (*OM.*, p.75)
(6) She hugged him until she was afraid that she was going to break his bones. (*OM.*, p.238)
(7) Looking at him through the window ten yards away Noelle could still feel the animal magnetism, still feel the old desire and it swelled up in her, mixing with the hatred until she was filled with a sense of exhilaration that was almost like a climax. (*OM.*, p.284)
(8) We've heard all about that business again and again until we're sick of it. (*N.*, p.77)
(9) Here the view was less interrupted till it rested in the distance on the curve of Whiteharen Bay. (*N.*, p.129)
(10) The path descended gradually until it came out at last on an

open space, round in shape, with a low battlemented parapet. (*DM*.,p.17)

これらの例では主節の主語と *until* 節の主語は同一指示になっているが、*until* 節は主節の行為の目的とは取れないだろう。(5)では、主語は心臓だから目的を持つという意図性は考えられない。(6)では、骨を折ってしまうのではないかと恐れる為に抱き締めたのではない。(7)では、主節の動詞は *feel* であり感じるということは何かをする為にという目的をもってすることとは思えない。(8)では、やはりうんざりする為に聴くというのではなく、寧ろ繰り返し聴いた結果うんざりしたということになろう。(9)、(10)では、主語は各々、*the view* と *the path* で目的を持つということは考えられない。従って、主語の同一指示は *until* 節の目的か結果かという区別を決めるものではない。

では、(5)から(10)の *until* 節は結果を表すものと言えるのかということを検討してみよう。(8)は、聴いた為にうんざりしたというわけだから原因があってその結果という意味の結果と取れる。(6)も、抱き締めた為に骨を折るのではないかと恐れるようになったと、原因があっての結果と考えられる。しかし、(5)では、心臓がどきどきし始めた為に破裂しそうになったというのではなく、心臓がどきどきし始めて最後には破裂しそうになるところまでいったということである。(7)では、欲望を感じていたのが高まっていって高揚とした気分にまでなったということで、欲望を感じた為に高揚とした気分になったというわけではない。(5)と(7)の主節は *until* 節で示される事態の原因になっているのではない。更に、(9)と(10)の場合も、どこどこに至るまで眺めは遮られていなかった、どこそこに至るまで道はゆるやかな下りになっていたということで、主節は*until*節の示す事態の原因になっているわけではない。また、(9)と(10)は(5)と(7)と違って *until* 節で主節で述べられる状態が極まった状態が示されているわけでもない。

以上の例から分かるように、*until* 節には目的とも結果とも取れない例が

ある。更に目的とも結果とも取れない *until* 節をみていこう。

(11) She kept forgetting the strong physical impact that Larry had on her until they met after an absence. (*OM.*, p.276)

(11)では、「忘れていた」為に「しばらくして会った」のではないし、また主節の動詞 *forget* は *feel* と同様に目的を持って行う行為を表す動詞ではないから「会う」為に「忘れていた」のでもない。また「忘れていて会う所までいった」というように主節の状態の極みを *until* 節で示しているというのでもない。これらのことは、(12)についても言えるだろう。

(12) I'd like to keep it until I'm too old to see where I'm flying. (*OM.*, p.249)

「それを続けた」結果、「何処を飛んでいるのか分からない位の高齢になる」のではないし、また「高齢になる」為に「それを続ける」のでもない。また続けるという行為の極みが高齢になるということでもない。(12)の(11)と違う所は、これからしたい事の希望を述べた文だから *until* 節は主節の行為の行われる範囲の目安を示していると言える点である。それは(13)、(14)においても同様である。

(13) She waited until they were reduced to ashes. (*N.*, p.83)
(14) I wanted to call you sooner but your father asked me to wait until he was better. (*ON.*, p.125)

どちらも *wait* という動詞が使われているが、待つことが灰にするのでもないし彼を良くするのでもない。また灰にする為に或いは良くする為に待つのでもない。待つという行為がいつまで続けられるかという目安を *until* 節は示している。目安という概念は *wait* という動詞の意味からして必然的なものである。

次の(15)、(16)は、(11)と同様、*until* 節が主節の示す事態の結果、目的、

到達点、目安のいずれにもなっていない例である。

(15) Everything went well until one of those unforseen chances occurred. (*HD.*, p. 214)
(16) I thought that my new lecture on language and communication was going well until I checked my students' reaction. (*LC.*, p. 1)

これらの例では、*until* 節で主節の示す事態とは全く関係のない、予測され得ない事態が起こって主節の示す事態が急に終わることになる。つまり、*until* 節は偶発的終点を示すと言える。

このように、*until* 節の意味は綿密に検討すれば、目的、結果、到達点、目安そして偶発的終点と多岐にわたる。だが、Heinämäki (1978) の例について述べたように常にこれらの意味のうちのどれか一つになるとはっきりと割り切れるのではなく、次の例のように複数の意味が混然一体としている場合がある。

(17) I rehearsed her till she was word perfect. (*M.*, P.266)
(18) But when we couldn't get a table until you mentioned Fraser's magic name, . . . (*OM.*, p.258)

(17)では「リハーサルをした」結果、「彼女は一語も間違わなくなった」とも取れるし「一語も間違わなくする」為に、或いは「一語も間違わなくなる」まで「リハーサルをする」とも取れる。つまり、*until* 節は結果を表しているとも目的、目安を表しているとも言えるだろう。(18)では、「*Fraser* の名前を出す」ということが「なかなかテーブルにつくことが出来なかった」ので意図的になされたことなのか、それともたまたまそうされた偶然なのか分からない。つまり、*until* 節の意味は結果と偶発的終点で曖昧である。

このように *until* 節の意味は様々に解釈できる。話し手の意識の中ではどのような意味で *until* を使っているのか明白であっても、聞き手にとっては必ずしもそうではない。文脈からどの意味になるか判断できる場合もあれば曖昧なままになることもある。どの意味に取られるかは文脈に基づく聞き手

の解釈次第である。寧ろ、いずれの場合においても明白に *until* の意味するところというのは「～まで」という主節の示す事態の成立する限界ということである。目的、結果、到達点、目安、偶発的終点といった意味はそれぞれの文脈から出てくるものであって *until* 自体の意味ではないと思う。従って、*until* の意味としては唯一、主節の動作、状態の続く限界としておけばよいのではないか。この *until* の示す限界は時間的限界に限られはしない。上にみた(9)、(10)を振り返って貰いたい。(9)では、景色がどこどこに至るまで遮られていなかったということ、(10)では、道がどこそこに至るまで下りになっていたということでどちらも場所の描写である。主節と *until* 節の間に時間的推移があるわけではない。「景色」も「道」もそれ自体が動いているわけではない。しかし、ここでも推移ということは考えられ、それは話し手が場所の描写をしていく上での視点の移動ということだ。話し手の描写におけるあとさきということで、*until* 節は主節で示される状況の成立する限界を示していると言えよう。従って、*until* の意味は主節の事態の成立する限界を示すものだとしておけばよいと思う。

2．*While*

小野（1984）は接続詞 *while* について対照または反意、時間、理由という三つの意味を認めている。英和辞典にも複数の意味が記載されていて、例えば、研究社新英和大辞典第5版では1．～の間、～する間に、～する間は、2．～とはいえ、3．～なのに、然るに、ところが一方；同時に、（主に新聞口調で）そして、という三項目の意味が示されている。小学館プログレッシブ英和中辞典第2版では、1．～するうちに、～する間ずっと、するかぎりは、2．～と同時に、そして一方、3．（反対、比較対照、譲歩）～なのに対して、に反して、だけれど、する一方と記載されており、大修館ジーニアス英和辞典第4版では、1．（期間、時点）～する間に、～の間じゅう、～と同時に、2．（対照、譲歩）～なのに、～だけれども、だが一方、3．その上というように示されている。ここでは、*while* の意味を小野（1984）

にある時間、対照・理由の三つで考えてみる。

(19)は、小野（1984）で理由の意味で出されている例である。

(19)　"I cannot sit by the fireside, while he is abroad in inclement weather."

確かに(19)は「彼が悪天候の外にいるのだから私はじっとすわっていられない」というように理由に取れるが、他方「彼が悪天候の外にいるのに私がじっとすわっていられない」というように対照の意味で取れるし、また「彼が悪天候の外にいる間、私はじっとすわっていられない」という時間の意味でも取れるだろう。このように *while* の意味を複数に解釈できる場合は他にもある。

次の例は、対照・反意と時間の両方で取れるだろう。

(20a)　While we were suspecting him he was suspecting us. (*N.*, P.231)
(20b)　我々が彼を疑っている｛間／のに｝彼も我々を疑っていた。
(21a)　Watching television indiscriminately for many hours on end is bad enough, perhaps; but *sleeping* while the television is flickering and chattering away hour after hour is both an insult to those appearing on the screen and an admission of one's own lack of mental vitality. (*EP.*, p.66)
(21b)　テレビがつけっぱなし｛の間／なのに｝眠っている。
(22a)　They even feel a sense of injustice or jealousy — the injustice of having to live separate lives, jealousy that others, such as family or friends, can often be with the loved ones, while the poor lover himself has to be far away. (*EP.*,p. 18)
(22b)　自分は離れていなければならない｛間／のに｝他の人は一緒にいられる。
(23a)　He supplies the information requested by the caller while the customer is forced to wait. (*EL.*, p.32)
(23b)　客が待たされている｛間／のに｝情報を与えている。

次の例は、*while* 節が時間と理由の両方に取れる例である。

(24a) While we are on the subject of this word "never", we might as well take a quick look at another famous example. (*EP.*, p.12)

(24b) この語を話題にしている {間／のだから} 別の有名な例をみておいた方がよいだろう。

以上、*while* 節の意味が曖昧になる例をみてきた。しかし、理由や対照・反意に取れる場合のその理由や対照・反意というのは、*while* で結びつけられる二つの節の内容、両者の関係から汲み取られ得るものであって、それぞれの節の内容からそのような意味が取れない場合は*while* があってもそのような解釈は出来ない。例えば、(25)は理由や対照・反意では取れない *while* の例である。しかしここでも *while* は何らかの意味を伝えている筈で、それは主節の時間指定ということになる。

(25) In the beginning she had asked what he did while she was gone. (*OM.*, p.242)

上でみた曖昧な *while* 節の例は、全て時間を表すものだと言えた。従って、*while* 自体の意味として理由や対照・反意を取り上げる必要はないのではないか。時間を *while* 本来の意味ということは出来ないだろうか。*OED* で歴史的に*while* の用法をみてみると、時間を表す用法の初出が1154年であるが、それ以外の用法は、a. as long as (implying 'provided that'; if only) の初出が1375年、b. at the same time (implying opposition or contrast); adversatively, when on the contrary or on the other hand, whereas; concessively, it being granted that; sometimes nearly = although の初出が1588年、c. in modern colourless use: at the same time that, besides that, in addition to the fact that ; often = and at the same time, and besides の初出が1750年と、ずっと遅く出てきたもののようである。*OED* の時間以外の用法として挙げられている意味も根底に時間を含んでいるものと思われる。そうすると*while* の核となる意味は結局、時間であると思われよう。

しかし、他方、時間とは取れない *while* 節は存在する。それが次のようなものである。

(26a) She was better off than they were, because they were stuck here for the rest of their lives, while she would be out of here in a month or two. (*S.*, p.34)

(26b) 彼女は一、二か月すれば外に出られる {のに／＊間} 彼等は生涯ここから動けない。

(27a) While this book will not remove from love its mystery, I hope it will clarify matters sufficiently to help do away with these misconceptions, . . . (*RT.*, p.34)

(27b) この本は愛の謎を取り去るものではない {けれど／＊間} 誤解を除くのに十分な位、問題を解明してくれるものだろう。

(28a) While before this time the child has learned that its wish is not necessarily its mother's command, it still clings to the possibility that its wish might be its mother's command and the feeling that its wish should be her command. (*RT.*, p.38)

(28b) 子供はこの時までにその望みが必ずしも母親の求めることではないと知っている {が／＊間} 尚もその可能性にしがみつく。

(29a) While I generally find that great myths are great precisely because they represent and embody great universal truths (and will explore several such myths later in this book), the myth of romantic love is a dreadful lie. (*RT.*, p.46)

(29b) 通常、偉大な言い伝えは云々の理由で偉大なのだと思っている {が／＊間} ロマンチックな愛の言い伝えは真っ赤な嘘だ。

(30a) While such great leaps are most commonly made during adolescence, they can be made at any age. (*RT.*, p.67)

(30b) 大きな飛躍は思春期に起こるのが普通である {けれども／＊間} いかなる年令でも起こり得る。

(31a) It is interesting that while both were great actors, Hitler's speeches are totally unremembered, while Churchill's are often quoted, (*EP.*, p.28f.)

(31b) どちらも偉大な俳優である {が／＊間} チャーチルの演説はよく

引用される｛が／＊間｝ヒットラーの方は全く忘れられている。

(32a)　While this is obvious, it is something that most people to a greater or lesser degree choose to ignore. (*RT.*,p. 14)

(32b)　これは明白である｛が／＊間｝大半の人が多かれ少なかれ無視している事だ。

(26)では、彼女の一、二か月後の事と彼等の一生の事ということで *while* 節は主節の時間指定にならない。(28)では、*while* 節が現在完了で主節が単純現在で、やはり双方の節の時間がずれている。(29)、(30)そして(31)の後の方の例は、*while* 節は *generally*、*most commonly*、*often* を含み、その節で表されている事が通常、一般的、よくある事なのだというわけで一時的な出来事を表すものではない。(27)、(32)、(31)の先の例の *while* 節は各々、この本の特性、二人の人間の特徴、そしてある事の性質を述べるものであって、やはり一時的な出来事を表すものではないと言える。従って、これらの例では *while* 節が主節の示す事態の成立を限定する期間を示しているとは取れないのである。これらの例は全て、対照・反意に解釈出来るが、これは上で述べたように主節と *while* 節の節の内容から汲み取れるものである。

では、*while* の核と呼べる意味は一体、何になるのか。今までみてきた全ての例に共通して当て嵌まるのは、こういう事が起こっている、起こった、起こるだろう、或いはこういうことが言えるということを一方で認めて主節の事態を述べるということだ。それが、節の内容、主節との関係から時に対照・反意の解釈になったり理由の解釈になったり、或いはそのどちらでもなく *and* に等しいものになったりする。また、主節の示す事態を限定する期間としての解釈が可能であれば時間として解釈されるということになるのだと思う。

4．以上、複数の意味があるとされる従属接続詞の内、*until* と *while* について各々の核となる意味を考えてみた。これは辞書に記載されている意味を改めて見なおす試みの一つである。複数の意味を持つとされる従属接続詞は

他にも多々あり、それら全てについて同様に一つの核となる意味を抽出できるのかを今後考察していきたい。

参考文献

Declerck, R. (1988) "Restrictive *WHEN*-Clauses" in *Linguistics and Philosophy* 11 ; pp.131-168.

Heinämäki, O.T. (1978) *Semantics of English Temporal Connectives*. Indiana University Linguistic Club.

小稲義雄他編 (1980)『新英和大辞典』研究社。

小西友七他編 (1988)『ジーニアス英和辞典』大修館。

小西友七・安井稔・国広哲弥編 (1987)『プログレッシブ英和中辞典』第2版　小学館。

小野捷 (1984)『英語時間副詞節の文法』英宝社。

Quirk et al. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London and New York : Longman.

Simson, J.A. and E.S.C. Weiner eds. (1989) *The Oxford English Dictionary* 2nd ed. Oxford : Clarendom Press.

田岡育恵 (1992)「『譲歩』の」*When*」『成田義満教授還暦祝賀論文集』英宝社。

引用文献

Bantock, G. (1986) *English People, English Opinions*. 成美堂. (*EP*)

Christie, A. (1956) *Dead Man's Folly*. New York : Pocket Books. (*DM*)

_____. (1955) *Hickory Dickory Death*. New York : Pocket Books. (*HD*)

_____. (1950) *Murder is Announced*. New York : Pocket Books. (*M*)

_____. (1941) *N or M?* New York : Berkley Books. (*N*)

Farb, P. 著・田中啓介・田添包子編 (1979) *The Ecology of Language*. 英宝社. (*EL*)

McConnell, J. (1991) *Language, Culture and Communication*. 成美堂. (*LC*)

Peck, M.S. 著・青木庸效・柏木俊和編 (1991) *The Road Less Traveled*. 金星堂. (*RT*)

Sheldon, S. (1990) *The Other Side of Midnight*. Glasgow : Fontana. (*MO*)

_____. (1988) *The Sands of Time*. Glasgow : Fontana. (*S*)